Trinity

キズナエピソード\_東山陽彩\_02

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０

------------------------------------------

//とびお自室

//ヴィジュアルノベル形式開始

その後、陽彩とは何回か一緒に書店に行くことになった。

陽彩曰く、

「ぼくの話についてこれる奴はなかなかいないからな」

とのことらしい。

陽彩のSF関連の読書量は尋常じゃなく

俺が読んだことのない小説で、

オススメの作品を次々に教えてくれた。

普段は口数が少ない陽彩だったが

好きなもの、特にSF小説のことを話し出すとすぐ熱くなるのは

年相応に見えてどこか面白い。

そうして、交流を深めているうちに、

陽彩はかなり――いや、とてつもなく頭がいいことがわかった。

そして、定期考査時期に入った俺は

歳下だが陽彩から勉強を教えてもらうことに……。

//暗転

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//陽彩の自室

[陽彩]

「まず、この図を見れば点Pは

QAの中心を回転してることがわかるから、

可変性のある辺はどれか絞り込める。」

[陽彩]

「そしたら、問1は余弦定理を使って

範囲を求めるだけだ。

後はさっきの問題の応用で、問3の体積までわかるだろう？」

[とびお]

「ちょ、ちょっと待ってくれ。

その絞り込みとか、応用のし方を教えてくれ……」

[陽彩]

「試験範囲に含まれているってことは、

授業で一度習ったんだろう？

何故それが分からない？」

[とびお]

「その理由はすぐ分かる。

脳みその構造が違うからだ！」

[陽彩]

「脳内の各領域の発達具合、反応のし方や接続性には

個人差があると思うが、

脳の構造自体が違うなんてことはないはずだ……」

[陽彩]

「まあいい……とりあえず、少し休憩しようか

お茶を淹れてこよう」

[とびお]

「おぉ、ありがとう。

よろしく」

//暗転

[陽彩]

「お茶だ。」

[とびお]

陽彩はお茶を乗せたお盆をテーブルの上に置くと、

無言でちょこんと、俺の足の間に座ってきた。

[とびお]

「あ、ありがとう。

ただ、なんでそこに座るんだ？」

[陽彩]

「そこにちょうど良さそうな隙間があったからだ。

それに、このソファーはぼくの家のものだぞ」

[とびお]

「いや、そうなんだけど……」

[陽彩]

「じゃあ問題ないな」

[とびお]

「陽彩がいいなら別にいいけど、

イマイチ休憩し辛いな……」

[とびお]

「そういえば、

俺の勉強に付き合ってくれるのは有難いんだが……

陽彩は学校で友達作ったりとかしなくていいのか？」

[陽彩]

「……別に人付き合いが嫌いなわけじゃない。

ただ、同じクラスの人間にはあまり興味が湧かないな……

皆、徒党を組んで安心するための付き合いのようだし」

[陽彩]

「ただでさえ退屈な授業と生徒会の業務があるのに、

更につまらない付き合いにまで時間を割きたくないからな。」

[とびお]

「そうか……。じゃあ家族はどうなんだ？

たしか、海外で働いてるご両親とも、

あんまり会ってないんだよな……？」

[陽彩]

「親とも今は距離を取っている。

あっちもぼくとどう接していいか分からないみたいだし。

離れて住む方がお互い楽だ。」

[とびお]

「じゃあ俺の課題が頭なら、陽彩の課題は

人と触れることじゃないか？

両親と離れてるのだって、そうだろ」

[陽彩]

「むやみに触れ合っても摩擦を起こすだけだ。

触れ合わなければ、摩擦など起こらなくて済む」

[とびお]

「陽彩」

[陽彩]

「なんだ？　ん？　んんっ!?

んんんんっ……！

い、いきなり接吻とはなにを考えてる！」

[とびお]

「接吻って。小説の読みすぎじゃないか？

触れ合って初めて伝わるものだってあるだろ。

今みたいにな」

[陽彩]

「なっ……強制わいせつをしておいて、

なんか立派風なこと言うな！」

[とびお]

「ハハっ、顔真っ赤にした陽彩もかわいい」

[陽彩]

「うう……このー！」

[とびお]

「ひゃっ!?

おい、照れ隠しで脇を突くな。

お返しだっ！」

[陽彩]

「ひゃあぁっ！

……許さんっ！」

[とびお]

「うわ、わかった！

やめ、やめろーっ!?」

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話終了